

## 「人間らしく生きる」

泉南市立信達中学校 二年 津村 一樹  
つむら かずき

僕が生まれる前、母は女の子が、父は男の子がほしいと思っていたらしい。おなかの中にいる僕が男の子だとわかり、母は男の子用にと、水色の毛糸を買ってきて、本を見ながらベストとパンツを編み始めたそうだ。男の子女の子、そんなことより、自分のところによくやってくる赤ちゃんが、ニコニコしながらそのベストとパンツを身につけている姿を想像して、とても幸せな気分で編み上げたそうだ。今もそのベストとパンツは大切にあってある。そんな話を聞くと、嬉しいような恥ずかしいような気持ちになる。

しかし、なぜ水色だったのか。男の子用は水色なのか。今の僕は赤が好きなのだが、と思う。そう言えば、学校のトイレのマークは、青と赤で男女が区別されている。何となく、男の色女の色として使い分けられている場面が多いことに気付いた。誰が決めたのだろう。一才の僕が、ピンク色のキティちゃんの手押し車を倒して満面の笑みでこちらを見ている写真がある。その手押し車は、祖父と祖母が買ってきてくれたそうだ。母は、「なんでピンクでキティちゃんなん。」と、尋ねたらしい。

「青いのを買いたかったけど、売り切れていたから、ピンクにした。」と聞き、少し残念に思ったそうだ。しかし、一才の僕は、押しながら歩いたり、倒して上に乗ったり、大好きな手押し車でやんちゃに遊んだそうだ。写真の笑顔を見ても、そのピンクの手押し車が気に入っていたのだということがよく分かる。

男らしい、女らしい、という言葉がある。「男なのにメソメソ泣くな。」や「女だから大人しくしなさい。」など、男はこうあるべき女はこうあるべきという姿を求められることがある。これも誰が決めたのだろうか。男は仕事に出かける、女は家で洗濯やご飯の準備をする、という男女の役割も何となく決まっているような気がする。しかし、僕の家は違う。父も母も仕事に出ている。父の方が帰りが早いので、夕食の準備を父がし、片付けを母がする。僕にとっては、それが当たり前だ。僕も料理に興味がある。料理のできる父がカッコイイと思う。男だから、女だから、という固定した考えが常識になっているとすると、僕の感覚は常識からズレていることになる。しかし、僕の家とは反対の場合もあると思うし、全く違う場合もあるのかもしれない。性別によって生き方まで決まるのは、少し違う。その時、その場面で一番良い選択ができればいいので、色々なパターンがあって、僕はいいと思う。

テレビを見ていると、おネエ系のキャラで売っているタレントさんがけっこういる。男なのに女の人のような言葉を使う人や、化粧をして、女の人のような服を着ている人もいて面白い。僕は、その人たちのことを「おかま」と言った。すると、母に、

「その言葉は使ってほしくないんよ。」

と言われた。体と心の性が一致しなくて苦しい思いをしている人がいることを話してくれた。男と女が結婚すると思っていたが、男同士や、女同士の結婚を認めるところもあるそうだ。知らなかった。真剣なんだ。ふざけているのではないのだ。笑いをとるためにあのような言葉づかいをしているのではなかったのだ。LGBTという言葉を知って聞いた。教えてもらったが、難しく、きちんと理解できなかった。しかし、男の体に生まれてきたのに、心が女だったらどうだろう。考えてみた。体育の時間やクラブの時、着がえることがつらいだろうと思った。僕は、この夏休みはたくさん海に行き泳いだけれど、その時の着がえもつらいだろう。そうだ、水着自体つらいのではないかと思った。僕が当たり前と思っている男女別のトイレもつらいだろう。

「男なのにナヨナヨしない。」「女だからおしとやかにしなさい。」なんて、決めつけられた言葉は、よけい

につらくて苦しい気持ちにさせるのではないかと思う。人は誰でも、人間らしく生きる権利があると、学校の時、社会科で勉強した。「男らしく」や「女らしく」ではなく、「人間らしく」だ。何となく決められているようなことを、何となく受け入れていくのではなくて、自分で考えることができるようになるからいけないと思った。自分が一人の人間として、周りの人のことを大切に、もちろん自分のことも大切にしながら生きていけるようにしたい。これから先、色々な場面で、しっかりと自分の心で考え、判断することができる大人になりたい。